

ねぶた制作期間におけるケガ、痛み等の調査（２）

―受講生へのアンケート調査と前年度調査との比較―

岸本 栄嗣・平山 健宣

一、はじめに

本学の名物授業のひとつである「クリエイティブ・ワークショップⅡ」では、二週間集中して集団でねぶたを制作する。

巨大なねぶた制作は危険を伴う作業が多く、常にケガや痛みと隣り合わせの状況である。そこで、二〇二一年度に引き続き、制作期間中のケガや痛み等の実態の把握を目的として、受講生を対象にアンケート調査を実施した。加えて、さらに実態を探ることを目的としてインタビュー調査も試みた。

二〇二二年度のねぶた制作は、二〇クラス（一クラス約三〇名）で行った。各クラス一名ずつ担当教員が入るほか、学生スタッフや他の教職員も適宜サポートにあたる。全日程を三期に分けて実施された。途中に休日を挟み、一六日間で計一二日間の活動であった。第一期が八月三〇日～九月二日、第二期が九月五日～八日、第三期が九月一日～一四日であった。一日の活動時間は九時三〇分から一八時一〇分であり、一八時三〇分には完全撤収とされていた。二〇二一年度は感染症対策の観点から、制作現場への集合人数に制限をかけていたが、二〇二二年度は制限は設けなかった。

二、対象と方法

アンケート調査対象は二〇二二年度「クリエイティブ・ワークショップⅡ」受講生七四一名（二年生六四七名、二年九四名）。アンケートフォームはグループフォームで作成し、無記名式とした。質問の内容は、ケガ等の有無、内容、部位、原因、痛み・だるさの有無、部位、実施した対策についてなどであった。

アンケートの配信は第一期、第二期、第三期の各期最終日に行った。配信と回収は受講生全員が登録しているグループ・クラスルーム内で行い、最終的には第三期終了日の一週間後に回答受付を停止した。回答者数と回収率は、第一期が三三六名、四九・四パーセント、第二期が二八二名、三八・一パーセント、

第三期が三〇一名、四〇・六パーセントであった。

時期ごとにアンケートを回収したため、時期間や昨年度データとの比較の際は、割合（小数点第二位を四捨五入し、パーセントで表記）をおもに用いた。

三、結果と考察

（一）ケガについて

①ケガの有無

ケガの有無について時期別に示した（図１）。

回答者における「ケガ有」の割合は、第一期一四・六パーセント、第二期三二・三パーセント、第三期二七・二パーセントであった。第一期から第二期にかけて倍増し、第二期から第三期にかけては減少している。ねぶた制作では、工程のなかで中心となる作業は移り変わる。第二期では、第一期に比べ多くの学生が針金や工具類を使用するようになり、使用頻度も増す。これにより、ケガのリスクは高まると考えられ、第一期から第二期の「ケガ有」の増加要因はこれによるだろう。

ただ、三期を通じてほぼ横ばいであった二〇二一年度調査結果（第一期一七・三パーセント、第二期一五・九パーセント、第三期一五・九パーセント）と比べると、異なる傾向を示した。とくに第二期では一五・九パーセント→三二・三パーセント、第三期では一五・九パーセント→二七・二パーセントと「ケガ有」の割合が昨年度と比べかなり増加している。この要因として二つのことが考えられる。

第一に、昨年度より回答率が向上したことである。昨年度は、全三期終了後に、回答を求めた結果、回答率は三〇・一パーセントにとどまった。回答率が向上したことで、実態に近いデータを拾うことができた可能性がある。第一筆者、第二筆者ともに全三期間現場にいたが、ケガ等の報告が昨年度に比べて多かったという実感はなかったことから、実態が大きく変化したとは考えにくい。

第二に、時期ごとに調査したことで受講生の記憶が新しいうちに回答してもらえたことが考えられる。昨年度調査では受講生は記憶をさかのぼって回答したため、忘れてしまっていたものもあったのかもしれない。軽微なケガであればあるほど、そうしたことはありうるだろう。

以上のことから、第一期から第二期にかけて、ケガの発生が倍増していたことが明らかとなった。また、前年度調査との差異の要因は、二〇二二年度にケガ

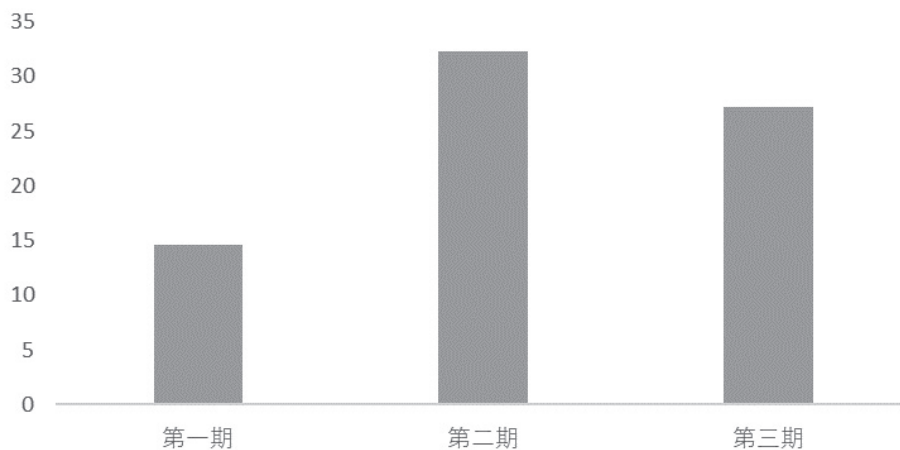


図1 時期別の「ケガ有」の割合 (%)

発生が激増したというより、おもに調査方法の違いによるものであると考えられた。昨年度に比べ、より実態に近いデータを把握できた可能性は高い。

②ケガの内容と部位、原因

ケガの内容と部位、原因について、各時期に占める割合を示した(図2、図3、図4)。なお、複数回答可としたため、合計は100パーセントにはならない。

内容では「切り傷」一〇一件、「かすり傷・ひっかき傷」が一〇〇件とほぼ同数、続いて「打撲」が四八件、「刺し傷」が一五件であった。

内容の各時期に占める割合をみると、第一期では「かすり傷・ひっかき傷」が二七件(八・〇パーセント)と最も多く、「打撲」一七件(五・一パーセント)、「切り傷」一三件(三・九パーセントパーセント)と続いた。第二期では、「切り傷」が四六件(二六・三パーセント)と最も多く、「かすり傷・ひっかき傷」三四件(二二・一パーセント)、「打撲」一四件(五・〇パーセント)となった。第三期では、「切り傷」が四二件(二四・〇パーセント)と最も多く、「かすり傷・ひっかき傷」三九件(二三・〇パーセント)、「打撲」一七件(五・六パーセント)となった。

第一期から第二期にかけて、「切り傷」、「かすり傷・ひっかき傷」が増加しており、工程が進むことでリスクがより高まるケガがあることがわかる。昨年度結果では、「かすり傷」と「打撲」は三期ともに同程度の発生であったが、今回の結果では第二期、第三期では「かすり傷・ひっかき傷」の数値が高いものとなった。

昨年度は「かすり傷」と表記していた選択肢を、「かすり傷・ひっかき傷」と変更したことの影響はあるだろう。このほか、軽微な「かすり・ひっかき傷」の場合、発生直後であれば覚えていたが、時間の経過とともに忘れてしまうことも考えられる。先述のとおり、今回は時期ごとにアンケートを実施したことで、昨年度の調査時にはすでに忘れてしまっていたケガを把握できた可能性が考えられる。

部位では、「手の指」が二三五件、「腕(付け根・手首)」六七件、「手の平・甲」三四件、「あし(付け根・足首)」三三三件の順に多かった。

部位の各時期に占める割合では、第一期が、「手の指」が二七件(五〇・九パー

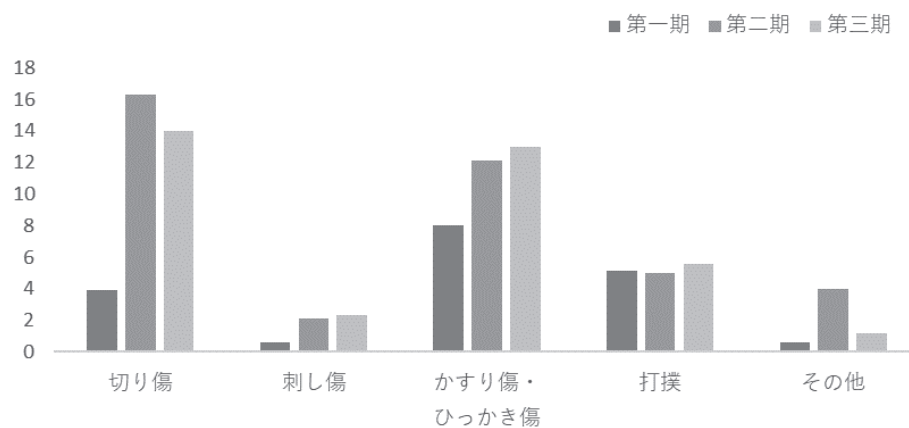


図２ ケガの内容 (%)

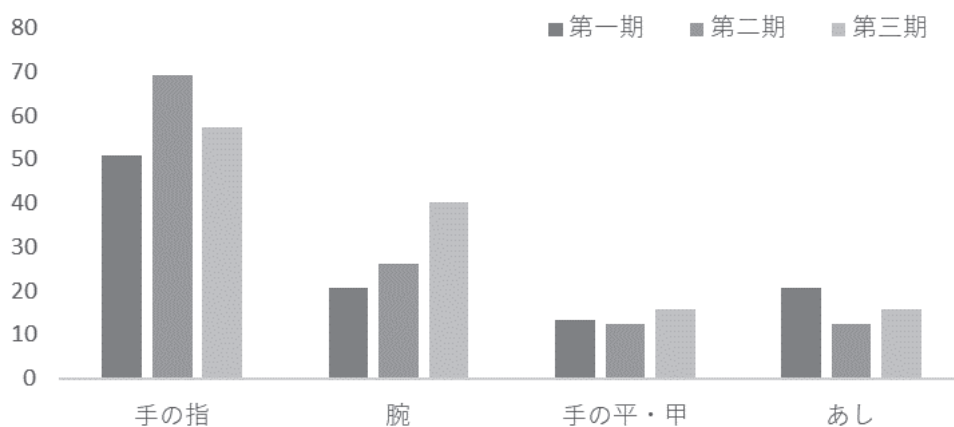


図３ ケガの部位 (%)

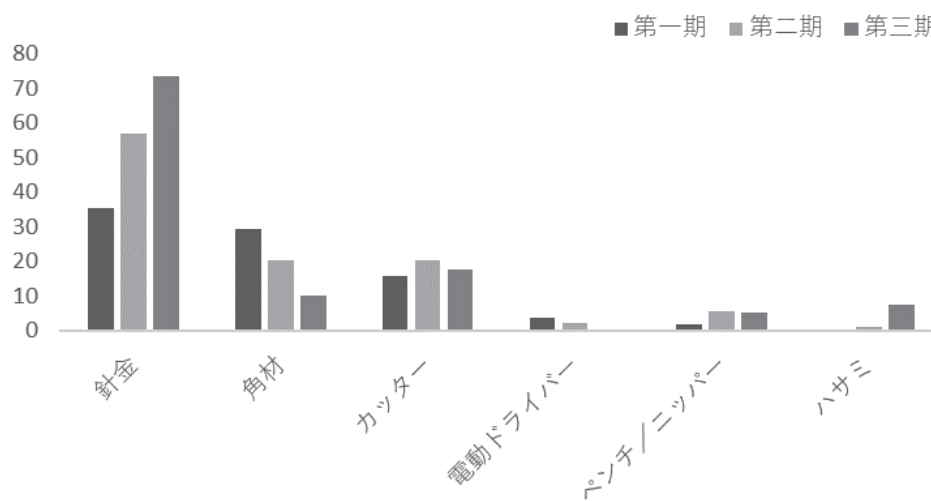


図４ ケガの原因 (%)

セント）、「腕（付け根・手首）」一件（二〇・八パーセント）、「あし（付け根・足首）」一件（二〇・八パーセント）、「手の平・甲」七件（二三・二パーセント）の順であった。第二期が、「手の指」が六一件（六九・三パーセント）、「腕（付け根・手首）」二件（二六・一パーセント）、「手の平・甲」一件（二二・五パーセント）、「あし（付け根・足首）」一件（二二・五パーセント）の順であった。第三期が、「手の指」が四七件（五七・三パーセント）、「腕（付け根・手首）」三三件（四〇・二パーセント）、「手の平・甲」一六件（一九・五パーセント）、「あし（付け根・足首）」三件（二五・九パーセント）の順だった。全三期で、「手の指」がケガ部位の過半数を占めていた。とくに第二期では、ケガのおよそ七割が手指の負傷ということになる。昨年度も「手の指」の割合が突出していたが、四割程度であった。手指のケガは、昨年度把握した以上に発生している可能性が明らかになった。

また、「腕（付け根・手首）」のケガは時期を追うごとに増え、第三期では四〇・二パーセントと高い割合となっている。ねぶたの完成が近づくにつれ、木組みの上に登ったり、木組み内部のせまい空間に潜り込んだりしての作業が生じる。こうした腕を傷つけやすい状態となることが要因であると推察された。

原因では、「針金」一二六件、「角材」四一件、「カッター」四〇件の順に多かった。

原因の時期に占める割合をみると、第一期が、「針金」一八件（三五・五パーセント）、「角材」一五件（二九・四パーセント）、「カッター」八件（二五・七パーセント）、「インパクト・ドライバー」二件（三・九パーセント）であった。

第二期が、「針金」五〇件（五六・八パーセント）、「カッター」一八件（二二・五パーセント）、「角材」一八件（二二・五パーセント）、「ペンチ／ニッパー」五件（五・七パーセント）であった。

第三期が、「針金」五八件（七三・四パーセント）、「カッター」一四件（二七・七パーセント）、「角材」八件（一〇・一パーセント）、「ハサミ」六件（七・六パーセント）であった。

「針金」が圧倒的に多いことは、昨年度同様である。改めて、「針金」はケガのリスクが高い素材であることがわかる。昨年度結果では、「針金」は第二期から第三期にかけて減少していたが、今年度は多少増加している。昨年度は、終盤に向けて針金を切断したり加工したりする作業が減少することが、原因とし

ての「針金」の減少ではないかと考察した。しかし今回の結果からは、切断や加工といった針金を作業の直接的な対象としない場合でも、針金が原因となって負傷している可能性がある。

③ケガについてのまとめ

ケガについて明らかになったことをまとめると、以下のとおりである。

・「ケガ有」の割合は、第一期一四・六パーセント、第二期三二・三パーセント、第三期二七・二パーセントで、第一期から第二期にかけて倍増し、第二期から第三期にかけてはやや減少していた。

・ケガの内容では、「切り傷」、「かすり傷・ひっかき傷」が圧倒的多数であった。「切り傷」は第一期から第二期にかけて激増し、「かすり傷・ひっかき傷」は、時期を追うごとに微増傾向にあった。

・ケガの原因では、多いほうから「針金」、「角材」、「カッター」の順であった。「針金」は第二期、第三期でとくに高い割合であった。

・ケガの部位では、「手の指」、「腕（付け根・手首）」、「手の平・甲」、「あし（付け根・足首）」の順に多かった。「手の指」は全三期を通じて高い割合であった。

工程の進行により、作業内容や扱う道具・材料は移り変わる。ケガのリスク要因も同様である。ただ、第二期でおおよそ三人に一人が、第三期でも四人に一人以上が負傷している。道具の扱いに慣れていない初期や前半だけでなく、後半や終盤に向けても注意喚起や具体的な対策が必要である。

（二）ケガ以外の痛み・疲労・だるさについて

①痛み・疲労・だるさの時期ごとに有無

痛み・疲労・だるさ（以下、痛み等）の時期ごとに有無について示した（図5）。

「痛み等有」の割合は、第一期七〇・五パーセント、第二期六六・三パーセント、第三期六八・九パーセントであった。第一期ですでに七割を超える者に何らかの痛み等を自覚し、若干の変動はあるものの、第三期まで横ばいとなっている。これは、昨年度調査結果（第一期三五・四パーセント、第二期四九・二パーセント、第三期五三・七パーセント）とは大きく異なる。

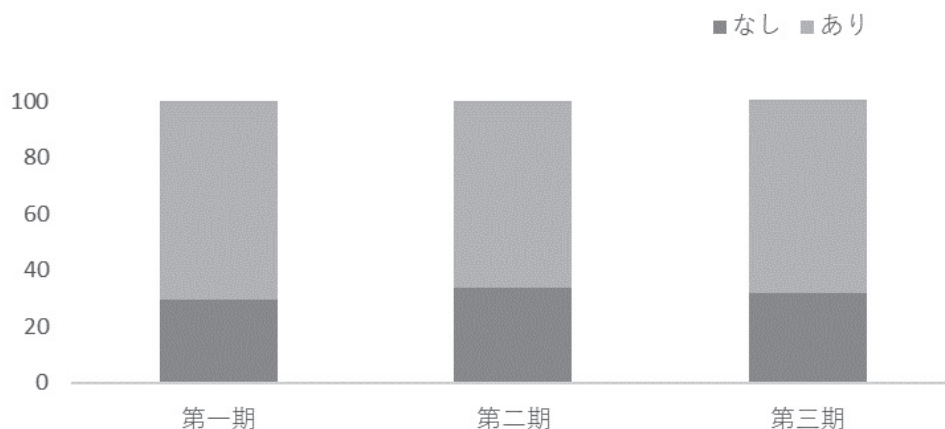


図 5 ケガ以外の痛み等の有無 (%)

まず考えられるのは、ケガ同様、アンケートの実施方法の変更による影響である。時期ごとにアンケートを配布・回収したことにより、記憶の新しいうちに実態に即した回答を得られた可能性がある。

もう一点は、制作期間中の登学日数が増加したことである。二〇二一年度は感染症対策のため、各クラスの集合人数を最大二五名までという制限をかけた。そのため、学生は割り当てられた部材・部品を自宅で各自制作する日があった。そのため、体を休めたり、楽な姿勢で過ごせたりする時間が二〇二一年度よりも長かった可能性がある。

いずれにしても、痛み等を自覚する受講生が第一期から半数を超えていることが明らかとなり、憂慮すべき状況である。

②痛み等の部位

痛み等の部位について、時期ごとに示した(図6)。

第一期では、「腰」、「首」、「肩」、「頭」の順で、第二期では、「腰」、「首」、「頭」、「背中」の順で、第三期では、「腰」、「肩」、「首」、「背中」、「頭」の順が多かった。

「腰」、「肩」、「首」、「頭」、「背中」は、時期を追うごとに増加していくという点で共通している。この痛みやだるさが、疲労性のものであることが推測される。「腰」については時期を追うことの増加が比較的安定的に多いように見え、「首」と「肩」は第二期から第三期にかけての増加が大きいように見える。第一期から痛みを自覚している「腰」を代償することによる負担が「肩」「首」「背中」に現れているのではないかと思われる。今回は痛みの質や強さについては把握していないが、単に痛みを自覚する者が増えただけでなく、痛みの強さが増していることなども十分に考えられる。

今年度は、ねぶた制作に入る前にスタッフには腰痛等の予防のためのミニレクチャーを実施して注意を促すとともに、受講生に対しても初日に痛み等に関する注意喚起を行い、制作期間中にはストレッチなどについての情報提供も行った。

しかし、今回の調査結果を見る限りは効果的だったとは言えず、もっと別の対策を探る必要性がある。

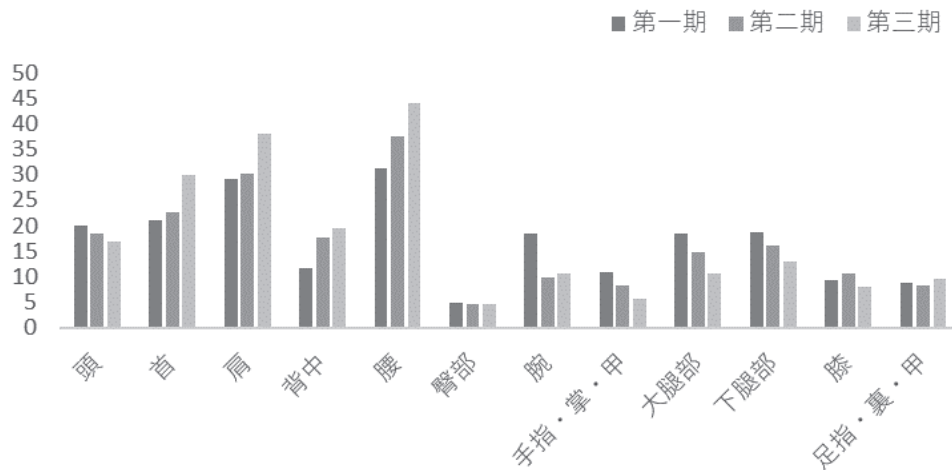


図 6 ケガ以外の痛み等の部位 (%)

(三) インタビュー

多様な対策を探る必要性への自覚から、身体的、精神的に大きな負荷のかかるクリエイティブ・ワークショップⅡの支援に関する改善点を顕在化させるべく、二〇二二年度に本授業を受講した学生にインタビューを行った。

①目的

二〇二二年度「マンデイ・ワークショップⅡ」受講生の身体的・精神的への負荷の実感・経験を探ること。

②対象

二〇二二年度「マンデイ・ワークショップⅡ」受講生三名。対象者の選定に際しては、対象者Aを中心に所属クラスや学年、クラス内での役割の違いなど、さまざまな視点からの情報が集まるよう配慮した。Aはクラスのリーダーであったことから第二筆者とは受講当時によく話していただけでなく、他の学内活動でも交流があったことから、一定の信頼関係が形成されているとの判断のもと依頼した。Aからの了承後、Aから調査目的や方法をB、Cに説明してもらい承諾を得ることで対象者として決定した。

【インタビュー協力者一覧】

- ・ A 女性 二年生 リーダー
- ・ B 女性 一年生 グループメンバー
- ・ C 女性 一年生 グループメンバー

③方法など

- ・ 半構造化グループ・インタビュー
- ・ 場所・大学内講義室
- ・ 実施日時・二〇二三年四月一日（午後）

インタビューは第二筆者が務めた。第二筆者は、二〇二一年度よりマンデイプロジェクトの授業運営全体を担当している。インタビューのおもな内容は「マンデイプロジェクトを受講してみて」、「ワークショップパート（前半）五週」でのこと、「ねぶた制作全体について」、「ねぶた制作における心と体の健

康について」であった。質問の概要は事前に伝えてあったがインタビュー当日は対象者の回答によって臨機応変に会話を進め、インタビューは協力者の同意を得たうえで録音した。録音データを繰り返し確認し、重要な部分を抽出してテキストデータに変換した。本稿ではとくに「身体面に関する語り」と「精神面に関する語り」に着目し、整理した。以下、インタビューの内容を身体的なものと精神的なものの二つに分けてみていく。

身体面については、以下のような内容が語られた。

B 「わたしのクラスでは、ケガはそんなになかったですね。高いところに登るときにはヘルメットを被ったりとか、大体の学生がルールを守れてたんじゃないかなと思います」

A 「ケガとかについては、私の制作していた場所が大きな階段のある教室だったので、針金を運ぶ時とか危なくなりそうなシーンでは、クラスを担当してくれていた教員や学生スタッフの人たちがずっと注意してくれていたので大丈夫だった気がします」

筆 「それでも危険な行為をやめようとしないうメンパーには、こういった対応をしていたのでしょうか？」

B 「もうそうになったら、その作業から外れてもらうしかないのです…」

A 「そうそう、そこを無視してやられても…って感じ」

筆 「ケガ以外に腰とか肩の痛みとかはなかったですか？」

A B 「うーん、なかったと思います…」

C 「わたしの場合はもともと肩こりがひどいので…（笑う）」

B 「あったかもしれないけど、Cさんのようにこの制作のせいではないと思うのかもしれないですね」

筆 「なるほど、ではCさんが身体的な面で気をつけていたことはありますか？」

C 「そうですね、一時間に一回休憩を必ず取るようにしてたんですが、休憩しているかどうかは見た目では分かりにくいので、ねぶたの下に敷いてあるブルーシートから出るように声をかけまくってました。ブルーシートから出ると強制的に作業ができない状態になるので、声掛けの方法を

工夫することで無理矢理にでも休憩して欲しいという意図を伝えるようにしてましたね」

このような回答を聞いてもっとも驚きを感じたのは、ケガや痛みはあまりなかったという回答についてである。ケガや痛みに対してはクラスの担当教員やその他教職員、学生スタッフなどの声掛けにより、学生間でそれほど注意をしなくても気をつける雰囲気になっていたとのことであった。

他方の精神的なことについては多くの問題が発生し、受講生同士でさまざまな工夫をしていたという回答であった。

B 「制作が進むとどんどん時間的に追い詰められていくので、その場で起きた問題に対する対応が追いつかなくて、他のメンバーもですけどくにリーダーの精神的な負担が心配でしたね」

筆 「その心配に対して、こういった工夫をしていたのでしょうか？」

B 「そうですね、自分はリーダーをサポートするポジションで動いていたので、リーダーに何をしたらいいのかを聞くのではなく、できるだけ判断を減らせるような質問の仕方を意識しました。で、その答えを受けて、手の空いているメンバーへの仕事の割り振りとかもできるだけやるようにしましたね」

筆 「Aさんは精神的な面についてどうでしたか？」

A 「今考えるとかなりうざかったかもしれないけど、私はリーダーをやっていたのでメンバー全員の個人LINEを入れておいてその日の状況によって個別に連絡を入れてましたね。授業内で作業をしているときにメンバー全員とゆっくり話すことはできないので、LINEなどのツールを使ってなるべく対話できる時間を増やすことで、精神的な負担を少しでも解消できたらいなと思ってやっていました」

筆 「声をかけ続けることによる精神的な負担もあると思いますが、そのあたりは大丈夫でしたか？」

A 「私は二年生でほとんどの受講生より年が上だったこともあってか、そのあたりは弟や妹の面倒見るような感じであまりストレスなくやれた気が

します」

筆 「Cさんは精神的な面についてどうでしたか？」

C 「後半はとくに制作が切羽詰まってきて時間がなかったんですけど、メンバーの誕生日を祝うというのをきつかけに望天館の屋上へクラス全員で行ってお菓子を食べたり、少し昼寝をしたりしました。制作現場から離れてリフレッシュしたことで、その後の制作にはかなりよい影響を与えたと思いますね」

これらの回答以外にも工夫として次のようなことが具体的に挙げられた。

- ・一、二年生混成のクラスのため、学年間でのコミュニケーションが上下関係にならないよう注意した。
- ・リーダーなどの役割を担当する学生も他のメンバーとそれほど経験値は変わらないため、リーダーだけに負荷がかからないようリーダー以外の言動をしっかりとコントロールすることに努めた。
- ・対面以外の顔が見えないコミュニケーションの場合は、絵文字を多用するなどして感情の伝え方に配慮した。
- ・クラス全体の「E」などでリアクションをしてくれている人は、対面でもしっかりと動いてくれる子が多かったので注意深く確認するようにしていた。
- ・制作が進むにつれクラス全体がどんどん追い詰められていくため、後半はさらに意識的にクラスメンバーへの声かけの頻度を増やした。

前述しているとおり、「クリエイティブ・ワークショップⅡ」の受講中および受講直後でのアンケートでは、ケガや痛みがあったと答えている学生が多く存在する。しかし、授業終了から約半年を経過した二〇二三年四月の聞き取り調査では、負荷の経験として語られたものの中心は精神的なことであった。

これにはいくつかの理由が考えられる。

第一に、ケガや痛みなど身体的な負担については、具体的な対策を示しやすいため、注意喚起の内容が、受講生およびクラス担当者たちに理解されやすいことである。

第二に、精神的な負担については、人と人との関係性により変化することで、

気をつけるべきポイントや状況を好転するための方法論が無数に存在するということである。

第三に、本授業のような大規模な共同制作を行うグループワークにおいては、個人よりも集団での在り方に重きが置かれがちになることである。

第四に、終了から時間が経ちすぎていることである。

今回の聞き取りの目的はおもに身体面にあったが、実施してみるとある程度予想はされていたものの、精神的な負荷に対する経験について多くが語られる結果となった。このことから、かつて必修科目であった本授業が選択科目になった今でも、精神的にかかる負荷が大きいということに変わりがないと言える。

四、おわりに

これらのことを踏まえ、授業運営の上では、ケガや痛みに対する注意喚起や具体的対策の情報提供をよりの確なものにしていかなければならないだろう。大きなケガは後遺症が残ることや、最悪の場合命を落とす可能性もゼロではない。腰痛などは慢性化することがあり、そうなれば今後の生活や学修への影響は大きい。

他方で、具体的な対策を提示しにくい精神的な負担の軽減についてどのようなサポートが行なえるのかを探り、具体的な取り組みに落とし込む必要がある。多くの学生と関わる本授業だからこそ、多様な形で対応できるよう、さまざまな方法で受講生の声を集め、よりよい教育や支援につなげられるようを引き続き取り組んでいきたい。

参考文献

岸本栄嗣「ねぶた制作期間におけるケガ、痛み等の調査 ―受講生へのアンケート調査より」『京都芸術大学紀要Genesis 26』二〇二二年
一三四―一四二頁